

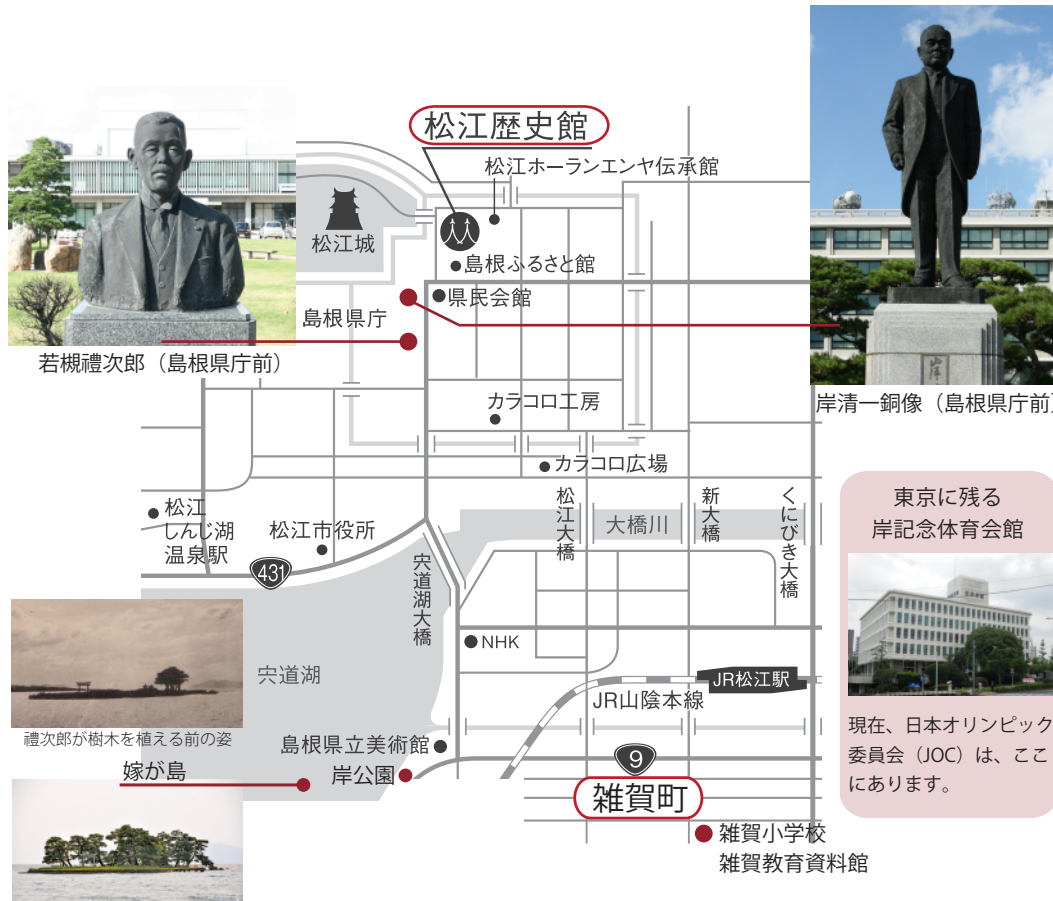
総理大臣・若槻禮次郎、「日本近代スポーツの父」・岸清一
立場は異なれど、日本のため、世界平和のため、
そして日本を支えてくれるであろう松江の後進のために尽くした
その心、その姿を忘れてはならないでしょう。

国を動かした出雲人

わか つき れい じ ろう きし せい いち
若槻禮次郎と岸清一

2人に会いに行ってみましょう

松江では今も胸像や銅像で、2人の姿を見ることができます。



2016年（平成28年）は島根県初の総理大臣である若槻禮次郎、
その翌年は幻の東京五輪を招いた岸清一
それぞれの生誕150年にあたります。
このリーフレットでは、松江市雑賀町出身の
2人の偉人が果たした功績について
紹介します。



岸清一



若槻禮次郎

2人を育てた雑賀町

2人が生まれたのは、下級武士が集まり暮らした
雑賀町でした。

江戸時代には厳しい身分制度があり、下級武士は
どれだけ実力があっても上級武士になることは、
まれなことでした。

それでも雑賀町の人々には、立身出世しようと教育
を怠らず、学問に励もうとする気風（雑賀魂）があり
ました。

2人はその気風を受けて成長します。



禮次郎が学んだとされる
『論語』(上)と『孟子』(下)
(松江歴史館蔵)

東京に残る
岸記念体育会館
現在、日本オリンピック
委員会（JOC）は、ここ
にあります。

島根県初の総理大臣

わか つき れい じ ろう

若槻 禮次郎 (1866-1949)

禮次郎は、貧しい家に生まれ、家計を助けるため小学校の教員として勤めながら勉学に励んでいました。

そして苦学の末に大蔵省（現 財務省）に入り、官僚になります。

後に当時の首相たちから信頼されて政治家になり、1926年には島根県で初めての内閣総理大臣（第25代）となります。



条約に調印する禮次郎

第一次世界大戦（1914年）の後、世界の国々は、どんどん増える戦費に悩んでいました。

そこで日本は戦費を減らすため、そして世界の国々が歩み寄るため、イギリスなどの国々とワシントン海軍軍縮条約を結び、戦艦を減らすこととなります（1922年）。

しかし、この条約では不十分なところが多かったため、新たな条約が結ばれることとなります（ロンドン海軍軍縮条約）。

すでに総理大臣を退いていた禮次郎は、日本の代表として会議に出席し、条約に調印します（1930年）。



条約署名の際使われた万年筆
（外務省外交史料館蔵）

世界の平和を想い、貢献した禮次郎は、松江のためにも尽くします。

成績優秀な児童に教科書や辞典を送ったり、枯れて数が減ってしまった嫁が島の樹木を植え直したりしました（1935年ころ）。

くさみつのぶしげ 草光信成筆《若槻禮次郎肖像画》（松江市立雑賀小学校蔵）



幻の東京オリンピックを招いた

きし せい いち

岸 清一 (1867-1933)

清一は、松江中学校（旧制）（現 松江北高等学校）を卒業した後、上京して東京帝国大学（現 東京大学）で法律を学びます。

大学を卒業すると弁護士となり、困っている人々のために、様々な問題の解決に力を尽くしました。

体育協会の会長となった清一は、海外で行われたオリンピックに選手たちを3度も率いて参加します。そして、1940年に開催されようとしていた第12回のオリンピックの会場を東京に誘致しようと努めますが、その途中で亡くなります。

清一の死後、第12回オリンピックの会場は東京に決定しますが、戦争のため中止となってしまいます。日本ではじめてオリンピックが開催されたのは、

戦後の1964年でした。

このとき日本でオリンピックが開催できたのは、かつて清一が誘致活動をした努力によるものだったのです。



幻の東京五輪（1940年）のちちぶのみや パンフレット
（秩父宮記念スポーツ博物館蔵）



選手の着用したユニホーム
（松江歴史館蔵）

清一は、スポーツを通じた国際交流、国際平和に力を尽くすだけでなく、松江の後進のために母校である松江中学校の優秀な生徒に支援を行うことなどもしました。

くさみつのぶしげ ほろ 草光信成筆《岸清一肖像画》（松江市立母衣小学校蔵）

